

ドローン映像で農作物管理 日本の技術活用、まず200農家

カンボジアでICT（情報通信技術）を活用した農業改革が動き出す。三菱商事と日立製作所が共同出資するスカイマティクスは2日、現地の日系農業企業J Cグループの契約農家が持つ農地で葉色解析用ドローン（小型無人機）の活用を開始した。まずは1年以内に200農家の農地撮影を目指し、農作物の生育状況などのデータを収集。農業の生産性が低いとされるカンボジアで効率化を促す狙いだ。



スカイマティクスがカンボジアの農地で初飛行させたドローン＝2日、コンボンチャム州（NNA撮影）

スカイマティクスが農業支援を目的に海外でドローンを活用するのは初めて。同社やJ Cグループなどの関係者が2日に集まり、南部コンボンチャム州にある約20ヘクタールの農地でドローンを初飛行させた。高さ140メートルまで上昇させたり、自動プログラムモードが問題なく作動するかなどを確認したりした。

スカイマティクスはドローンや関連するサポート、J Cグループは葉色解析できる農地の提供やデータ送信などを請け負うことで互いのコストを相殺する。初年度の事業費は数百万円で済む見通し。当初は葉色解析に注

力するが、今後は農薬散布用のドローンも導入する計画だ。

農作物の生育状況は毎日確認する必要性が低いため、当面は1台のドローンで各農家を回る。初年度にはJ Cグループが抱える約270の契約農家のうち、200農家の農地を撮影し、その映像を基に葉色解析を進める考えだ。

カンボジアの農家は、作物の生育状況を観察するため、目視で可能な範囲の葉色を確かめているのが現状。農地が広く全てを網羅できない上、精度も低いのが課題だ。ドローンの活用により、10ヘクタール当たりの作業が数分で済み、飛躍的に所用時間を短縮できるようになる。

今回の事業は、スカイマティクスとJ Cグループの双方に恩恵が大きい。スカイマティクスは、農地から取得したデータを日本の農薬製造会社などに販売することが可能になるほか、データの蓄積で機械学習の精度が高まる。カンボジアでは国際機関の農業支援も多く、今回の取り組みが認められれば、ドローンや付随するサービスの販売にもつながる。

J Cグループは、農家が購入するトラクターに融資している。葉色解析で問題が分かれば農家の低い生産性が改善し、融資の貸し倒れを防ぐことができると期待する。コメの生産量は1ヘクタール当たり約2トンと日本

NEWS HEADLINES

【農水】ドローン映像で農作物管理	1	アジア情報	
【社会】〔寄り道〕最も迷惑を被っていたのは救急車...	2	【社会】ダム決壊の洪水、被災者に仮設住宅を建設	4
【政治】新内閣9月20日に発足、首相が表明	2	特集	
【政治】中国外相、カンボジアの内政干渉に反対	2	【総選挙2018】段階的に制裁拡大の懸念	5
【建設】プリンス、シアヌークビルでリゾート着工	3	マーケット情報、その他	
【観光】プリアピヒアに自然観光区、日系の技術活用	3	商品市況	6
【経済】国道改修の安全強化を要請、公共事業省	3	クロスレート	6
【社会】首都で中国図書展、最新書籍を展示	3		

の約半分にとどまるが、ドローンの活用で生産性が 2 倍になる可能性もあるという。

農業はこれまでカンボジアの主力産業だったが、外資の投資が増えたことで縫製業の規模が拡大。GDP に占

める農業の割合は、17 年時点で 25% に低下している。政府は農業振興策を打ち出しているが、成長率は 1% を下回っている状況だ。低収入の農家は十分な肥料や農薬、農機がそろえられず生産性は低いとされる。